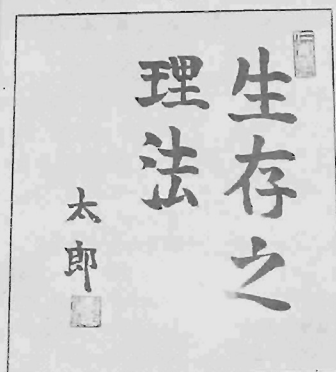


生存科学研究所

ニュース

Vol.1. No.6.

1986.11.10発行



目 次

- 私と武見先生との出会い
生存科学研究所顧問 井深大…………… 1
- 『科学と人間』の会議(第5回)…………… 2
- 国際的・学際的研究の場としての武見講座…………… 4
- エネルギー問題
—第29回生存科学研究会報告—…………… 7
- バイオインシュアランス…………… 9
- エッセイズ・キュート…………… 9
- 維持会員だより…………… 10
- ニュース・オブ・ニュース…………… 16
- 武見記念生存科学研究基金ニュース…………… 16

発行：財団法人 生存科学研究所

〒104 東京都中央区銀座4-5-1

聖書館ビル303

電話 03-563-3518

私と武見先生との出会い

井 深 大

十数年前の事です。札幌の医師会館が新築され、その開館式に私が出席した時に行事の都合で朝から午後までその応接室で先生とお話をするはめになってしまったのです。それまでに武見先生については茅先生からさんざんお聞きしていました。

お医者様としてだけでなく、物理に対しても哲学に対しても大変高い見識を持って居られることを教えられ、かげながら尊敬していました。

ソニーの盛田会長がまだ副社長の頃、青山の家が先生のお宅に近いところからお付き合いがあり、お医者様として先生に色々御厄介になっている話もよくきかされていました。

医師会館の応接室で大先生を前に私も始めはおどおどしていました。

沢山の人が先生に挨拶に来られるのを、ややうさそうにあしらいながら、私とのディスカッションに熱を入れて来られました先生のお姿を今も思い浮べることが出来ます。

話題は東洋医学の問題でした。

私は今日まで三十年以上、はりの治療を続けて受けていますが、その時も二十年以上たっていたのだと思いますが、私の経験を通してもっと東洋医学が盛にならなければならぬ事を主張しました。先生は、私もそう思うので北里大学を中心に一生懸命やっているよといわれました。私は現状はどうも西洋医学の見地から、東洋医学が間違っていないかチェックしてやるという目ばかり取扱われていて、東洋医学の基本的な考え方にまで掘りさ

げて居らず、ただ治療の一つの方法とだけとしか取扱われていないのではないのでしょうか。自分自身の直す力をどう力づけるかという特色をもっと生かさなければと私なりの主張を精一杯先生にぶつけました。

此の問題については晩年までに二、三回お話をしましたが、此の生存科学の設立の時に声をかけていただいたのはこんな事が理由だったのではないかと思っています。

毎年、医学研究振興財団で「脳と心」とか「老化」といったテーマで二日に涉って、シンポジウムを催されるのに先生は一出席者として必ず毎年参加されていました。そこでお目にかかり、色々先生に質問の出来るのを私は楽しみにして居りました。

超音波で胎児を観察することの可否だの、私の夢だったチンパンジーに言葉をしゃべらすことの可能性、その方法等についてお話をしたことも思い出されます。私のような素人の突飛な意見でも頭から馬鹿にはなさらず、間違っていることはきびしく正し、よいものは本気でその具体方法まで考えて下さいました。

先生が亡くなられてからやっと生存科学研究所の法人許可がおりたのは返すがえすも残念な事ですが、武見先生でなければやれない事が沢山残されていると思います。

生存科学研究所は決して単なる医学研究所ではないので、あらゆる分野から生存と健康について考えられるような財団を前々から考えられていたと思うのです。

ハーバードの武見講座で、客員教授としての先生の講義がもっと続けば此の事が一層はつきりしたのにと、ほんとうに残念な事です。

細胞病理学的な考え方から神経病理学的考へ方にどんどん移って行くと共に、医というものの考へ方も細分化するのではなく、総合化しその守備範囲も単なる医から大きく拡がって行くことと思います。

特に老人人口が急激に増加する日本の現状

では、今迄想像も出来なかった色々な社会的な事柄が頻発し、それ等を含めた健康問題を対処しなければならなくなります。

人類の幸、不幸は健康による事が大であります。武見先生の到達された大きな幸福な生存を、広く活発に討議されるグループとして育つ事が、生存科学に残された宿題だと考える次第です。

『科学と人間』の会議(第5回)

第5回科学と人間の会議は、薬理学の世界の第一人者であり国立生理学研究所長でもある江橋節郎委員が、「化学伝達物質について」の題で、神経化学伝達物質の基礎的研究動向を通して生命科学の現状を展望した話題提供があり、これを中心として活発な討議が行われた。本会議の概要については以下の通りであった。

進歩するライフサイエンスで、一番難解でありかつ最も興味ある研究課題は、人間の精神の問題である。その課題のアプローチはヒトの脳と行動の研究にあるといえよう。脳と行動の研究として今日最も進んでいる研究にシナプスの研究がある。それはシナプスが化学伝達物質の面から脳における物質の科学としてとりあつかえるところにあるからである。シナプスは神経と神経の接合部で、電子顕微鏡下でみえるミクロナ場所である。シナプスを構成する神経における刺激の伝導は生物電気であって、それはインパルスとよばれており神経線維を伝わって神経の終末部に達する。そこはシナプスになり、生物電気から化学伝達物質の放出となって、物質による信号の伝

達が行われる。このようにシナプスは脳を構成する基本的なところであって、ここを化学伝達物質の面から解明することはきわめて具体的であるといえる。したがって今日世界の脳神経研究者の多くは、分子生物学的手法の発展とあいまって研究成果をこの分野で競っているのが現状である。

ここで、ちよつとふれておきたいことは、科学とはなれた社会的なことではあるが、今日日本で興味ある話題の一つに子供についての教育がある。教育は各人それぞれが身近に感じることもあり誰しも口にすることができる問題である。しかしその根源にふれる話となれば、これは単に経験にたよればよいというものではなさそうである。これまでの教育の問題に関して、科学的見地、それも人間の生物学的な立場からデータを提供するというようなことは、あまり類をみなかったように思える。

化学伝達物質とは、脳神経のはたらきに関する情報伝達の物質であることから、これまでこの研究は記憶と学習に深く関わっていると考えられてきている。つまりこれら化学伝

達物質の解明は、記憶 学習という生命現象の解明につながるということである。それは子供の脳の発達や人間の認識とか、言語を覚えるとかいう現象と結びつくことになる。化学伝達物質の研究は、教育に多くの実りをもたらすであろうと期待されている。

シナプスの研究は、脳神経の機構と関係するのであるから、さきにあげた子供の教育だけでなく、成人の脳の老化や、脳神経に関する病気、その他多くの人間の問題に関わっているといえる。江橋委員は、このような多岐多様の問題の基礎的資料を提供するシナプスの化学伝達物質について、全くの基礎的研究成果について、化学伝達物質の発見にもとづく歴史的なこともふくめてきわめて明解に解説した。とくに江橋委員に直接関係ある大塚正徳教授(東京医科歯科大学)のパラニューロンとサブスタンスPについて述べ、これと関連して今後の化学伝達物質の研究動向を紹介した。

江橋委員の講話後、各委員による活発な議論が展開された。人間の問題に係わるような議論は、ときとして分散し、その議論の深さをますことは少いのであるが、今回のように生物学的な知識を基盤として討議すると、根底に共通の理解があることで、分散することもなく人間に関する深い討議がおこなわれ、実りある成果があったといえよう。

(記) 青木 清

化学的伝達物質

物 質	発見者	(年代)	部 位
アドレナリン	高峰 讓吉	(1901)	副腎
	Elliott	(1904)	
アセチルコリン	Loewi	(1921)	迷走——心筋
		(1926)	
	清水 賢末	(1926)	神経——骨格筋
GABA	Dale	(1936)	同上
	林 謙	(1956)	(痙攣抑制)
	Kuffler	(1963)	神経筋(工ビ)
	竹内 昭	(1965)	神経筋(ザリガニ)
	小幡邦彦・伊藤正男	(1965)	(抑制電位過分極)
グルタミン酸	小幡邦彦	(1971)	プルキンエ細胞
	Robbins	(1963)	(甲殻類)
	竹内 昭	(1964)	甲殻類神経筋
サブスタンスP	Lembeck	(1953)	
	大塚正徳	(1975)	知覚神経

国際的・学際的研究の場としての武見講座

第2回フェロー・藤井 充（厚生大臣官房ライフサイエンス室）



第2回の武見フェローとして昭和60年8月から昭和61年7月までの約1年間ハーバードに過ごした経験を元に、ハーバード大学と武見講座の内側から感じたことを書いてみたいと思います。

ハーバード大学公衆衛生大学院

現在、ハーバードで行なわれている多くの研究の基底にある問題意識は武見講座の追求テーマでもある『限りある資源をいかに有効に使うか』ということにつきると思います。具体的には、最良の保健プログラム、診断、治療方法の選定、テクノロジーアセスメントにおいて、費用便益分析(CBA)、費用効果分析(CEA)が道具として使われています。この点ハーバードには医療経済、保健医療政策の専門家として学長のファインバーグをはじめ、ワインスタイン、スタッソン、私のアドバイザーであったシエパード、実務家としても有名なシャオ等全米を代表する学者がそろっています。その他、大学の講師陣は、日本の公衆衛

生学部では考えられない位の多職種で構成されており、主な専門分野を挙げるだけでも、医学、生物学、経済学、法学、行政学、数学、化学等があり、非常に学際的な集団となっています。従って、全世界から研究者、学生が集まってきており、研究テーマもアメリカ国内だけに限定するのではなく、疫学、熱帯医学、人口、保健政策の各学部を中心に国際的なプロジェクトも数多く動いています。

しかし、私の目からみても問題がない訳ではありません。多くの中堅の研究者は大学から給料相当額の何割かだけを得ており、後は学外からの研究費（日本の研究費の概念とはかなり違う）を獲得し、そこから生活費を捻出するという生活を強いられています。

そのため、研究費のために研究するということとなり、ア. 長期的な研究ができない。イ. 研究費の付かない研究はやりたくてもできない。ウ. 海外でのプロジェクトは研究を第一義的にするため必ずしも現地でのニーズを反映していない。の問題があります。

また、研究者はレーガン政権下の緊縮予算のあおりで研究費自体のワクが少なくなったため研究者間の競争が激しく、常にプレッシャーを感じているということでした。しかし、それらのデメリットはあっても日本の大学と比べて、研究費、スタッフの豊富さ、国際的視野を持った研究姿勢、素晴らしい研究成果には感心させられるとともに驚ろかされました。

武見講座

武見講座はハーバード大学公衆衛生大学院の、1つの博士号保持者のための特別講座として位置付けられています。武見講座のあるハーバード大学公衆衛生大学院は、大学本部のあるケンブリッジとチャールズ川をはさんだマサチューセッツの州都であるボストンにあり、メディカル・エリアと呼ばれる病院が集中している地区に医学部と隣あわせにあります。

武見講座がハーバードにあることは3つの大きな意味があるように思います。まず、ハーバードにあることそのもの。ハーバード大学は全米でも最も権威のある大学の1つですが、公衆衛生大学院もその例外ではありません。そのため、優秀な講師陣、学生が全世界から集っています。次に、地理的条件があります。ボストンはニューヨーク、ワシントンからそれぞれ飛行機で1時間、2時間の距離にあり、最先端の学問を通してアメリカの政治・経済の中枢に直結しているといえます。第三番目に、広い意味での周辺環境の良さです。町自体は、歴史のある古い町の一面と、大学都市として海外からの留学生も多く若々しい国際色豊かな町としての一面を持っています。ハーバードは、近隣の大学の中でも特に技術系では全米一といわれるマサチューセッツ工科大学(MIT)と緊密な連絡をとって研究を進めています。

武見講座のイメージをつかんでもらうために、まず各フェローを紹介し、次いで講座の活動について言及したいと思います。

第2回武見フェローは私を含めて6名で国籍、経歴、研究テーマとも様々でした。

エルファティ・サマニ(スーダン) 医学・

公衆衛生学

スーダンのハルツーム大学医学部助教授(現在、教授)。黒人である。イギリスで教育を受けた紳士。ハーバード大公衆衛生大学院で修士号、博士号を取った。自分のアフリカでの経験から出す意見には説得力がある。研究テーマは、乳児の栄養状態と感染症との関連について。

ギー・キャリン(ベルギー) 経済学
ベルギーのアントワープ大学の経済学部助教授。アメリカで経済学修士を取りベルギーで博士号を取った。アフリカでの長い活動経験があり、現地語を自由にあやつる。研究テーマはアフリカにおけるhealth care financing.

ユリエール・キトロン(イスラエル) 生態学
イスラエルのヘブリュー大学の研究員(現在、イリノイ大学獣医学部助教授)。エコロジーで博士号を取った後、蚊の生態から蚊の媒介する病気に興味を持ち公衆衛生修士号を取る。研究テーマはイスラエル、アメリカにおけるマラリア対策の比較検討。

トーマス・ユリベ(コロンビア) 行政
コロンビアの国立銀行の行政官(現在、食糧政策研究員)。アメリカで生まれ5カ国語をこなす国際人。数学を学んだ後、ハーバードで経済学、行政学の修士を取る。研究テーマはコロンビアの貧困世帯における合理的食料消費仮説の検証。

スタンリー・サミエルシン(スリランカ) 経済学
イギリスで経済学の博士号を取った後、スリランカのペラデニヤ大学の経済学部助教授講師をしている。経済の保健分野への適応に興

味を持っている。研究テーマはスリランカにおけるマクロ経済政策の保健状態への影響。

これら武見フェローの他に、武見プログラムの活動に参加する準研究員として4名がアメリカを含めて選ばれています。これにより、オーストラリアを除く全ての大陸からの研究員が人種、言語の壁を越えて時には議論し、時にはピクニックをしたりして国際的な雰囲気の中でお互いに研鑽を積みました。

武見講座の日常活動としては、毎月開かれる国際保健武見フォーラムと毎週行なわれる武見セミナーとがあります。

武見フォーラムは広く世界から講師をつのり国際的な保健問題について学外からの参加者を含めて討論が行なわれます。主な昨年のテーマは、インドにおけるプライマリ・ヘルスケア、WHOのエッセンシャル・ドラッグ、メキシコ地震の保健状態への影響、スモークレス・タバコと発癌に関する疫学研究、多国籍製薬会社の発展途上国向け販売政策でした。

武見セミナーはフェローが関心のある課題について講師を招き事前に渡された論文をもとに自由討論をするものです。1ヵ月から2ヵ月かけて同じテーマについて異なる角度から討論が持たれます。昨年は保健経済、保健医療制度、プライマリ・ヘルスケア、保健事業の評価についてセミナーが開催されました。

保健政策を国際的観点から議論したとき、まず問題になったのは武見講座の追求テーマである“限りある資源をいかに有効に活用するか”ということでした。そして約1年の議論の末概ねコンセンサスを得たのは、資源配分に係る多くの政策決定の方法論はあっても、最終的な決断に当たっては平等性、倫理問題への配慮が重要であるということでした。同

じ保健衛生の問題を考えるにしても、どうしても自分の専門分野から物事を考えがちですが、武見講座のように多職種が自由に意見を言える環境で集約されていく意見は本当に公衆衛生の向上に必要なものであるような気がします。

おわりに

日本で公衆衛生と言えば、一部の医師、保健婦、栄養士等のどちらかと言えば日陰の存在ですが、国際的には、一国の保健衛生の向上だけではなく、発展途上国の援助とも結びついたかなり輝かしい分野だと言うことが出来るのではないのでしょうか。また、保健衛生は多職種のマンパワーが有機的に連携してこそ実のあるものが行えるという認識が確立しています。

このような状況のなかで、多職種の研究者の集う国際的、学際的な武見プログラムが、保健問題においても今避けては通ることが出来ない限りある資源の開発と有効利用を掲げ、国境を越えて活動していることは非常に機を得たもののように思えます。私自身、武見プログラムの1年間は研究成果を上げただけではなく、国際的視野を広げ、新たな人脈をつくることができ、非常に有意義であったと感じています。

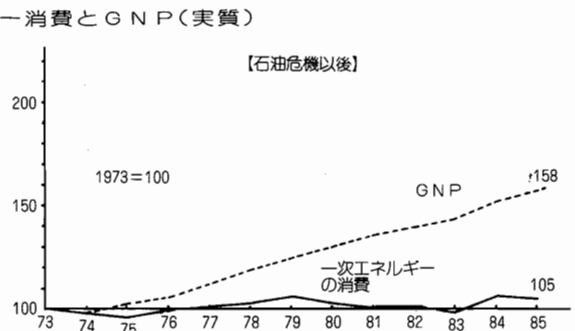
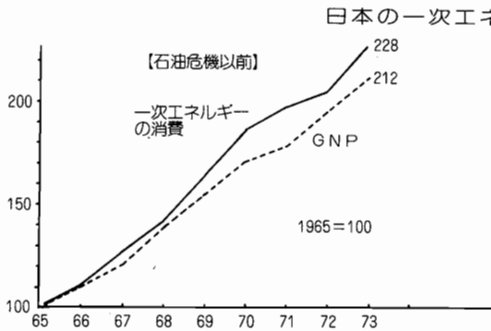
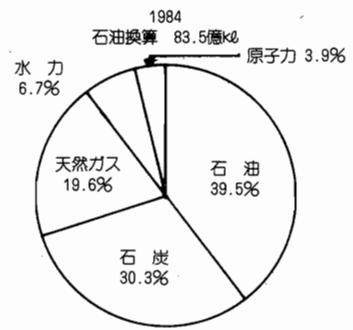
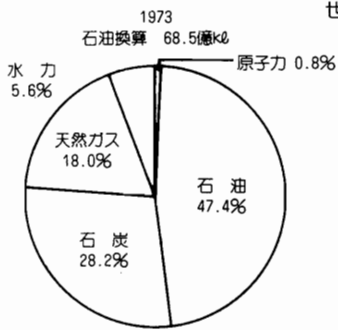
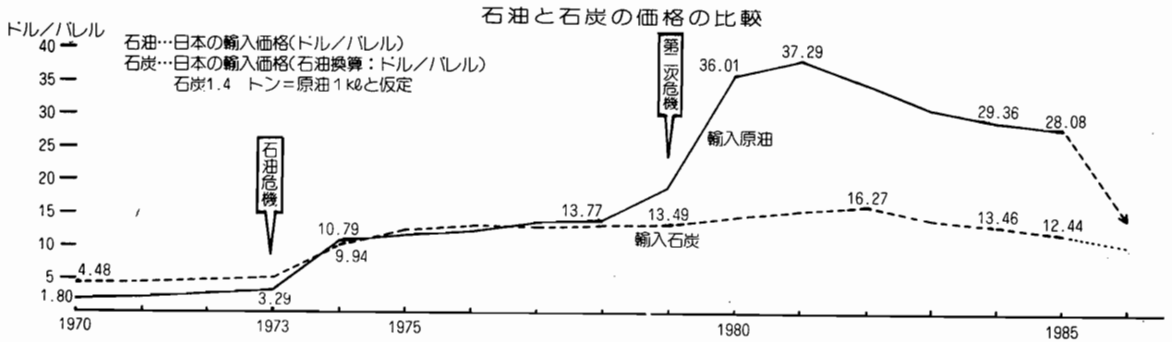
最後に、武見プログラムでの1年間の学研生活につき、これを支援して下さった武見プログラム及び関係各位に感謝の意を表します。

エネルギー問題—第29回生存科学研究会報告

9月20日経団連会館で開催された第29回生存科学研究会は、エネルギー問題をテーマとし、講師は大内幸夫NHK解説委員(NHK顧問、生存科学研究会員)、細身だが造詣は深

い。

講演の前に第2回武見国際保健シンポジウムの簡単な報告があった。



『石油30年説』がよく言われる。現在、石油の確認埋蔵量(現在の技術で採取出来、かつ商

業ベースにのるもの)は1113億キロリットルあり、一方世界の石油の消費量は約33億キロ

リットルである。1113億キロリットルを33億キロリットルで割ると約34年となる。これが『石油30年説』の根拠であるが、この説は石油が新たに発見されなければという前提の話で、正しくない。現実には毎年新油田が発見されており、石油の寿命は30年よりはるかに長い。しいていえば80～150年くらいであろう。少なくとも、石油がエネルギーの主力である時代は当分続くことは確かだ。

石油危機の起こった1973年の世界の一次エネルギー消費のうち、石油の占める比率は47.4%であったが、原油価格の暴騰によって省エネルギーが進み、1984年の比率は39.5%に下がった。(日本の場合は、77.4%から58.2%へ)一方、石炭の比率は28.2%から30.3%へ、原子力は0.8%から3.9%へ上がっている。

その原油価格が、今年に入って大暴落した。一バレル(159ℓ)27ドル程度であった原油価格は一時7ドルにまで下がった。これは明らかに行き過ぎであり、その後反騰して現在は13、4ドルの水準にある。

この暴落は世界経済に大きな影響を与えているが、本質的には原油価格の正常化にすぎない。石油危機(1973年)によって原油価格が4倍に上がった時、石炭価格もほぼ比例して上がった。しかし第二次石油危機(1979～80年)では、原油価格が更に3倍に上がったにもかかわらず、石炭価格は殆ど上がらなかった。つまり第二次危機の原油価格の暴騰は全く政治的に吊り上げられたものである。その無理な値上げが次第に剥げ、今回の暴落につながった。

銅、とうもろこし、木材など代表的な25の国際商品の過去の価格動向からみて、原油が今

後安定するとは思えないが、先進工業国は約140日の石油備蓄を持っているので第3の石油危機は容易には起こらないだろう。

石油危機以前、世界の一次エネルギーの消費は毎年5%程度伸びていたが、石油危機後は2%弱に落ちている。特にアメリカ(世界のエネルギーの25%を消費)日本、西ドイツなど、先進工業国の一次エネルギーの消費は殆どの場合、横這いとなっている。つまり、経済は成長しているが、エネルギーの消費は増えないという現象が11年も続いている。

このように、先進工業国の省エネルギーの効果は素晴らしいものがあるが、これらの国といえども、なおエネルギーを使い過ぎているといえる。

1984年の国民一人当たりの一次エネルギーの消費量をみると、アメリカは石油換算で、8827ℓ、ソビエト5577ℓ、西ドイツ4947ℓ、日本3500ℓ、中国661ℓである。

中国のエコノミストが「今から20年後に中国の経済の水準を、現在の日本の水準にしたい」と言ったのをきいたことがあるが、これを実現するためには、世界の石油と石炭をそれぞれ50%増産して、これを全部中国が消費するようにしなければならない。

このことからみて、先進工業国は、なお一層の省エネルギーと新エネルギーの開発に努力をしなければならない。

* * * *

以上の講演の後、討議が行なわれ、開発途上国等の経済の成長に伴うエネルギー消費の高まり、それにより環境汚染の問題が起ることが考えられるが、それに関連して、環境汚染のコストをどのように考えるか。代替エネルギーの開発をどう考えるか等の議論がなされ

た。

* * * *

次回は、今回の議論にも出てきた価格の問

題から、「ハイテクノロジー社会とメディコ・エコノミックス」をテーマに研究会が開催される予定。

バイオインシュアランス

武見先生は多くの新しい概念を提示されたが、なかにはそのユニークさのゆえに容易には理解されないものもあった。バイオインシュアランスはその典型といえよう。

武見先生がバイオインシュアランスについて書かれ、あるいは語られた機会は多いが、私にとってもっとも印象的であったのは、世界医師会に設けられ武見先生にその運営が委された「医療資源の開発と配分に関するフォローアップ委員会」の第3回会議(1981年7月末～8月初、東京パレスホテル)でのこの概念をめぐる内外学者による討論の場面である。

英語を母国語とする人々の中には、バイオはライフだからこれはライフ・インシュアランス(生命保険)の意味にもとれると発言した人もあった。白熱した論議が続くうちに、その内容からドクター・タケミのヘルスケア・システムと呼ぶのがよいとの発言も飛び出した。

武見先生がバイオインシュアランスという

概念に到達され、それを世に問われたことについて、私はそれを先生が社会保険ないしは健康保険を超えたものを求められたことのひとつの帰結であったと解釈している。メディコ・エコノミック研究委員会の委員に対しても、「保険」についてその本来の意味をよく勉強するようにと強く望まれた。

いうまでもなく、おこりうる物的損害のリスクを金銭的に保証するしくみが保険である。生命保険ではリスクは生命の損失であるが保証は金銭的になされる。バイオインシュアランスは生命ないし健康の損失を、金銭ではなく、生命体そのものの機構において保証するしくみを指向されたものではなかったか。

いま日本の社会保険制度礼賛がそここに顔を出しているとき、バイオインシュアランスの次元を忘れてはならないと思う。

(小泉 明)

エッセイズ・キュート

イギリスの経済雑誌「エコノミスト」の最新号は「ハイ・テクノロジーの二巨人」という題で、日米のハイテクの競争を特集しているが、日米どちらが有利かは判断が難しいと述べている。

その理由として、「日米競争の分野が違っている」ことをあげている。つまり、アメリカは

創造する分野で優れ、一方日本は開発の分野で優れているからだ。

日本をたんに「物まね猫」とかたづけず、開発力を高く評価しているのが、新しい視点だ。しかし、それにしてもこれほど教育水準の高い国民を多数持った国で、何故科学分野のノーベル賞授賞者が少ないのだろう、という疑

問もなげかけている。記事によると科学分野でノーベル賞を受けた科学者は、日本は僅か4人、これに対してアメリカでは158人ということだ。

そしてその理由として、次のようなスタンフォード大学の研究を紹介している。

- 日本は工業国としては後発で、先進国に追いつくのに精一杯であった。
- 日本ではグループの合意を尊重するのでラジカルな発想が受け入れられ難い。
- 日本の大学の研究体制は、官僚的で、研究費も少なく、かつ老人に支配されている。
- 日本にはventure-capital mar-

ket (リスクの多い新規産業に資本をだす市場) が殆ど存在しない。

- 日本の企業は借入金が多く、リスクの多い新規開発事業に資金を投入する余地がない

思いあたることが多いが、「エコノミスト」は諺にも、日米では差が認められると次のように述べている。

日本には「出る釘は叩かれる」という諺があるが、アメリカには「Let the daisies grow.」(雛菊が芽をだしたらどんどん育て)という諺がある。

(O)

維持会員だより

生存秩序と予防医学活動

財団法人岩手県予防医学協会が岩手県医師会の全面的なバックアップの下に再出発したのは昭和53年である。その5年後の昭和58年8月25日、昭和58年度予防医学事業推進全国大会が盛岡市で開催されることになった。第28回目の大会で、毎年全国各地都市で持ち回りで開かれていたものである。表彰などを主体にしたセレモニー的色彩の濃い大会で私自身、この大会に批判的であったのは事実である。

しかし、きまった以上、大会を単なるセレモニーやフェスティバルではない真の予防医学推進の大会にしなければならない。最も腐心したのはその事であった。その意味で大会のメイン・テーマ、講演者の選択については慎重に検討を重ねた。

現在の予防医学活動に果して拠り所となる哲学があるのか……。予防医学活動に足を突っ込んだばかりの私の卒直な疑問であった。

結論は意外に早かった。この命題に答えてくれるのは武見先生を措いてはないからである。病後にもかかわらずお元気で出席されていた生存科学研究会の席上、特別講演をお願いしたら二つ返事で快諾された。演題は「これからの健康問題」であった。

あとは一気呵成である。シンポジウムは「保健活動のはざまを考える」ときまり、シンポジストには「制度上の視点」須川豊先生、「医学上の視点」小泉明先生、「経済学上の視点」藤野志朗先生がきまった。須川先生を除いては、いずれも武見教室での私の兄弟子である。

大会のメイン・テーマはこれも演者がきまれば自ずからきまってしまう。一晩考えて私はメイン・テーマを「生存秩序の確立を目指して」にした。以下、大会プログラムのテーマの選定理由を再録する。

「諸科学の進歩、生活環境、社会環境、経済環境などの変遷に伴って、健康の価値観も変

化してきた。しかし、人間本来の健康権は不変のものである。健康権は生存権と言い換えてもよからう。予防医学の目的はこの健康権の確保にある。生命の尊厳がなければ健康権はあり得ない。原始時代の自然発生的な生存秩序から、人類の生存を取り巻く諸科学の発達は生存秩序に大きな変化を与えた。人口の高齢化もその一つである。原子、分子レベルでの個人を対象とするミクロ秩序、環境科学、生態学などの分野からの集団を対象としたマクロ的秩序、この両者を渾然として確立させることが生存権、健康権の確保の重要な条件である。ここに予防医学活動の原点を“生存秩序の確立”に求めたい」

この大会テーマはいささか大上段に構え過ぎた嫌いがあるかも知れぬが、とかく財政優先の今日、予防医学活動にとって最も重要か

つ優先すべきことは生命への畏敬であることを強調したかったからである。

武見先生自身も非常に楽しみにされていた特別講演は先生が、再び体調を崩されたため、残念ながら中止となった。急遽、シンポを切り換えて三名の先生方にそれぞれ同演題で特別講演をお願いした。会場を埋めた約2000名の参加者に深い感銘を与えたことは言うまでもない。少くとも、この大会に参加した人達は生存秩序の確立、生命への畏敬について、何か一つは会得したに違いない。

武見先生の膨大な知的遺産をあらゆる機会を通じて国民に配分することが、武見先生の薫陶を受けた弟子達の義務であろう。生存科学研究所がそのリーダーとして充分機能されんことを願うものである。

(会員 岩手県 田島達郎)

* * * * *

前号で紹介しました維持会員名簿に、有馬弘毅氏、原次郎氏、藤田信一氏ご3方のお名前を落してしまいました。その他にも誤字脱字が多く大変失礼を致しました。お詫び申し上げます。

今回あらためて、61年9月30日までにご協力戴いた維持会員のお名前を掲載致します。また、同日までに研究所へご寄付を賜わった方々のお名前も併せてご紹介致します。

(五十音順、敬称略)

* * * * *

個人維持会員

相澤 好治 北里大学医学部公衆衛生学助教授
青木 清 上智大学教授
安達 幹郎 安達内科医院院長

阿部 正和 東京慈恵会医科大学学長
有馬 弘毅 有馬医院院長
池内 哲 池内医院院長
生駒 純一郎 生駒内科院長
伊藤 国彦 伊藤病院院長
伊東 孝廣 医師
井上 節齋 医師
井上 無限 井上眼科医院
鵜浦 喜八 鵜浦医院
牛場 大蔵 国際医学情報センター理事長
宇都宮 徳馬 ミノファーマーゲン製薬本舗 社長
梅澤 勉 日本大学短期大学部教授
遠藤 勲 理化学研究所化学工学研究室主任研究員
大磯 敏雄 (財)日本国際医療団理事長
大江 精三 日本科学哲学学会前会長
大江 透 国立循環器病センター内科医長

大武 八郎		佐井 勇二郎	医師
太田 耕平	札幌太田病院院長	三枝 靖夫	医師
大谷 藤郎	社会福祉医療事業団理事	佐久間 義方	佐久間医院
大塚 恭男	(社)北里研究所	桜井 末男	桜井医院
大道 久	日大医学部病院管理学教室	佐藤 貴一郎	日本医師会
岡田 哲朗	医師	佐藤 弓雄	医師
小川 威彦	小川病院院長	佐藤 怜	佐藤医院
小川 清	茨城県医師会会長	椎津 重彦	医師
小川 春男	亜細亜大学経済学部助教授	城 巍	城外科
奥村 集	奥村病院理事長	杉村 進	杉村病院
開原 成允	東京大学医学部教授	杉本 大蔚	浅口郡医師会会長
笠貫 宏	東京女子医科大学	鈴木 重次	鈴木産婦人科医院
方波見 康雄	医師	鈴木 雪夫	東京大学経済学部教授
亀井 康一郎	医師	関口 光正	東京家政大学助教授
吉川 暉	大分市医師会会長、アルメイ ダ病院院長	高桑 栄松	参議院議員
菊池 宏	別府温泉病院院長	高田 勲	北里大学医学部教授
木村 文治	㈱クレジットコンサルタント社長	田北 文雄	田北医院
清瀬 隆	清瀬病院院長	武田 裕	大阪大学医学部附属病院
清永 恕	医療法人伸和会共立病院院長	武見 敬三	東海大学経済学部専任講師
草野 洋一	総理府次官、長崎県農林部農 産課	谷 信正	谷医院 檀原地区医師会顧問
久代 雄一	新発田市豊栄市北蒲原郡医師 会会長	田野 良雄	田野眼科医院院長 兵庫県医 師会参与
国井 長次郎	家族計画国際協力財団常任理 事	玉置 英夫	医療法人洗心会玉置病院
小泉 明	東京大学医学部教授	田村 勝利	北海道医師会常任理事
合原 正二	合原医院院長	田村 貞雄	早稲田大学社会科学部教授
小平 敦	前三井信託銀行顧問、	陳 慶民	南光企業(株)常務取締役
児玉 嘉生	別府市医師会会長	筑井 甚吉	大阪大学社会経済研究所教授
小林 金市	医療法人加藤病院	辻 政義	大牟田市医師会会長
小林 健次	茨城県医師会常任理事	土屋 健三郎	産業医科大学学長
小松 清彦	関川内科医院	中井 暉典	港区医師会会長
小松 真	小松医院院長、東京都医師会 理事	中上 光雄	深谷病院
斎藤 辰巳	斎藤外科病院	中田 富士男	兵庫県教育委員会委員
		中村 賢	北里大学医学部医療社会学専 任講師
		中山 昌作	医師
		永井 宏	医師

永瀬 正巳	岡山県医師会会長	村瀬 敏郎	渋谷区医師会予防接種センタ 一所長
名倉 直孝	医学部学生		
沼野 藤夫	東京医科大学第三内科	村田 謙二	高崎市医師会顧問
畑 一郎	畑病院、大分県医師会会長	矢数 道明	矢数医院院長
花輪 音三	花輪病院院長	安川 正彬	慶応義塾大学経済学部教授
林 周一	林外科病院院長	山口 正民	大阪府医師会前会長
林部 弘	環境庁大気保全局長	山本 幹夫	帝京大学医学部公衆衛生学教 授
原 次郎	原医院		
馬場 賢一	医師	弓倉 藤楠	開放型病院研究所所長
馬場 甫	馬場外科胃腸科医院院長	横瀬 昭幸	横瀬医院院長
福井 光壽	深川医師会会長		
藤川 正信	図書館情報大学教授	法人維持会員	
藤沢 正輝	医師	麻生商事(株)	代表取締役 麻生 泰
藤田 信一	藤田内科小児科医院	麻生セメント(株)	代表取締役 麻生 泰
不破 敬一郎	国立公害研究所副所長	井田(株)	取締役社長 井田 栄一
J.マシア	上智大学神学部教授	(株)医療情報電送センター	代表取締役 中山 繁
堀内 光	済生会中央病院名誉院長	霞ヶ関ビル岩井診療所	理事長 岩井 宏方
牧野 建紀	牧野整形外科医院院長	岩手県医師会	会長 三浦 新也
正橋 剛二	呉羽神経サナトリウム院長、 富山県医師会理事	(株)岩手県予防医学協会	会長 八木 義郎
松田 朗	厚生省保健医療局健康増進栄 養課課長	愛媛県医師会	会長 岡村 一雄
松田 英成	協邦通商(株)	大分県医師会	会長 吉川 暉
松田 博青	杏林学園副理事長	岡山県医師会	会長 永瀬 正巳
松原 聡	東海大学専任講師	科研製薬(株)	社長 澤 啓祥
丸山 泰一	水戸市医師会会長	(株)協和企画	取締役社長 梅田 幸雄
三藤 邦彦	学習院大学法学部教授	肝属郡医師会	会長 長浜 二三則
宮本 貴文	宮本医院院長	(株)セイトー	取締役社長 小副川 哲朗
向山 定孝	(株)日本科学技術研修所 代表 取締役社長	台糖フアイザー(株)	社長 紫野 巖
宗像 秀雄	青森県医師会理事	(株)津村順天堂	会長 津村重吉
村上 陽一郎	東京大学教養学部教授	テルモ(株)	常務取締役 石井一郎
		新潟県医師会	会長 川上 清治
		日本チバガイギー(株)	常務取締役 福島 潔巳
		広島県医師会	会長 杉村 純雄
		三井観光開発(株)	取締役社長 萩原 次郎

* * * *

個人寄附		金額(円)
安達 幹郎	安達内科医院院長	360,000
石島 弘	石島整形外科医院院長	30,000

井上 泰彦	井上眼科医院	100,000
奥村 集	奥村病院理事長	100,000
開原 成允	東京大学医学部教授	20,000
亀井 康一郎	医師	1,000,000
小泉 明	東京大学医学部教授	100,000
小泉 潤二/英明	愛知県立大学教授/㈱日立製作所開発部主任 技師	500,000
斎藤 任	斎藤眼科医院	10,000
嶋田 穰次	嶋田医院院長	20,000
高桑 栄松	参議院議員	460,000
高田 勲	北里大学医学部教授	150,000
高橋 央吉	茨城県医師会常任理事	200,000
高橋 祥吾	高橋医院院長	10,000
中尾 仁一		30,000
中村 賢	北里大学医学部医療社会学専任講師	200,000
中山 昌作	医師	1,000,000
林 周一	林外科病院院長	50,000
馬場 甫	馬場外科胃腸科医院院長	100,000
藤沢 正輝	医師	100,000
前田 昭二	前田外科病院院長	300,000
宮社 享	御明神診療所	10,000
宮本 貴文	宮本内科医院	180,000
宗像 秀雄	青森県医師会理事	10,000
矢数 道明	矢数医院院長	50,000
結城 栄一	結城整形外科医院	300,000

法人寄附		金額(円)
井田㈱	取締役社長 井田 栄一	500,000
エーザイ㈱	社長 内藤 祐次	100,000,000
小野薬品工業㈱	代表取締役 小野 順造	4,000,000
科研製薬㈱	社長 澤 啓祥	100,000,000
笠岡市医師会	会長 武田 一雄	100,000
川上郡医師会	会長 赤木 潤二	50,000
杏林製薬㈱	代表取締役 萩原 秀	600,000
協和醸酵工業㈱	医薬学術部 田中 千之	500,000
公益信託生存科学研究基金		10,000,000

三共(株)	社長 河村 喜典	50,000,000
(株)週刊日本醫事新報社	代表取締役 梅澤 信二	500,000
塩野義製薬(株)	代表取締役 吉利 一雄	20,000,000
(株)スズケン	取締役社長 別所 芳樹	3,000,000
住友製薬(株)	社長 土方 武	2,000,000
大正製薬(株)	代表取締役 上原 明	10,000,000
台糖ファイザー(株)	社長 紫野 巖	3,000,000
高梁市医師会	会長 西 教純	30,000
武田薬品工業(株)	会長 小西 新兵衛	100,000,000
田辺製薬(株)	取締役社長 足立 慶次郎	20,000,000
第一製薬(株)	取締役社長 宮武 一夫	10,000,000
大日本製薬(株)	取締役社長 藤原 富男	6,000,000
中外製薬(株)	社長 上野 公夫	30,000,000
(株)津村順天堂	会長 津村 重吉	210,000,000
東洋醸造(株)	社長 高田 哲男	1,500,000
富山化学工業(株)	取締役社長 中野 忠男	3,000,000
(株)新見医師会	会長 菅野 冬男	100,000
日本医師会	会長 羽田 春兔	5,000,000
日本ベーリンガーインゲルハイム(株)	社長 中野 徹雄	10,000,000
日本ロシユ(株)	代表取締役 フリッツ・ゲルバー	600,000
藤沢薬品工業(株)	代表取締役 藤澤 友吉郎	15,000,000
ヘキストジャパン(株)	社長 アルフレッド・ディーンスト	600,000
別府市医師会	会長 児玉 嘉生	200,000
松下電器産業(株)	社長 山下 俊彦	50,000,000
三井物産(株)	社長 江尻 宏一郎	100,000,000
(株)ミドリ十字	社長 松下 廉蔵	5,000,000
明治製薬(株)	学術部長 大久保 暉彦	1,500,000
持田製薬(株)	社長 持田 英	30,000,000
(株)ヤクルト本社	取締役社長 松園 尚巳	10,000,000
山之内製薬(株)	取締役社長 森岡 茂夫	15,000,000
結城整形外科医院	院長 結城 栄一	300,000
吉富製薬(株)	取締役社長 奥田 充夫	3,000,000

医薬品に関する日米専門家シンポジウム打ち合わせ

9月2日午後6時より、港区六本木国際文化会館において、ハーバード大学と生存科学研究所により「医薬品開発・その行政と倫理(仮題)」を主題とするシンポジウム開催についての打ち合わせがおこなわれた。

来日中のハーバード大学公衆衛生大学院薬理学教授Dr. Goldmanと、研究所熊谷副理事長はじめ学界、行政、製薬界等の医薬品開発に関係する方々が参集し、来年度中に開催する計画が討議され、準備のための組織委員会を設けることが決められた。

* * * *

第2回維持会員制度推進委員会

9月13日(土)研究所会議室において第2回維持会員制度推進委員会が開催された。

田村貞雄委員長を座長として維持会員制度の趣意書の原案が討議され、これは維持会員についてより一層理解を得易くするため、改定準備中の研究所案内に盛り込まれる予定である。その他、維持会員数を法人、個人とも夫々現在の2倍に増やす短期目標に向っての積極的活動について種々検討された。

* * * *

自主研究体制確立される

生存科学研究所は、数回の総務委員打ち合

わせの結果、自主研究として「健康政策研究員委員会」、「メディコ・エコノミックス研究委員会」、「バイオエシックス研究委員会」の3委員会を発足させた。

従来の健康政策研究委員会ならびに医薬品開発に関する研究委員会は名称を変更して存続するが、新たに出来た「健康政策研究委員会」の分科会として位置付けられている。

* * * *

文大韓医学協会会長来訪

10月7日、大韓医学協会会長文太俊博士が、生存科学研究所を来訪された。文会長は1985年より1986年10月まで世界医師会会長を務められており、今年度米国にて開催される世界医師会総会への出席の途次に当研究所を来訪されたものである。

文会長は、熊谷洋副理事長、小平敦専務理事、藤野志朗中央大学教授等から、生存科学研究所による研究活動の説明を受けた後、近い将来に当研究所と医療問題に関する共同研究事業を行うこと等を話し合った。

文会長は、武見太郎博士が日本医師会会長当時から日韓医療経済シンポジウム等を通して親交があり、熊谷副理事長と、武見博士との共同研究等の思い出を話しながら、旧交を暖められていた。

武見記念生存科学研究基金ニュース

武見記念論文編集委員会

9月20日(土)午後5時より、経団連会館にお

いて、武見記念論文編集委員会が開催された。

生存科学研究基金小平運営委員長の挨拶、

公益信託武見記念生存科学研究基金と財団法人生存科学研究所との関係ならびに作業分担についての説明、武見記念論文集に関わるこれまでの準備ならびに編集委員会誕生の経過説明があり、ついで幹事3名の指名と、藤川幹事による文献目録作成作業の準備進行情況の報告、小泉幹事による記念論文集作成作業計画案の概要説明があり、出席者による検討が活発に行なわれた。

出席者は顧問全員、編集委員の殆ど全員、さらに客員委員もふくめた多数であり、作業推進に大きな成果を挙げた。

編集後記

冬が駆け足でやって来ます。前号では編集の手違いで維持会員名簿にミスを生じ、大変失礼しました。

このニュースも間もなく満一才になろうとしています。新しい年を目の前にして、新しいアイデアを盛込んで成長しようと準備を始めています。

研究所の研究体制も、自主研究の委員会を見て戴ければ研究所の研究の全貌がお解り戴けるまでに整ってきました。皆様方の研究へのご参加も愈々道が広く開かれてくるとご期待戴けることでしょう。

委員および顧問（敬称略）

編集委員

江見康一	亀井康一郎	小泉 明
田村貞雄	武見敬三	筑井甚吉
土屋健三朗	中山昌作	藤川正信

客員委員

津村重吉	不破敬一郎	藤沢正輝
藤野志朗	三藤邦彦	安川正彬

顧問

板垣與一	大江精三	熊谷洋
中村元		